

# 韓国の作家ハンガンさんがノーベル文学賞 アジア女性で初の受賞

ロンドン = 藤原学思 2024年10月10日 20時02分 (2024年10月10日 23時52分更新)



スウェーデン・アカデミーは10日、2024年のノーベル文学賞を、韓国の作家ハン・ガンさん（53）に授与すると発表した。韓国人の文学賞は初めて。アジアの女性としても初となる。

## ● 暴力に満ちた世界で、希望を想像する 問い続ける作家ハン・ガンさん

スウェーデン・アカデミーは授賞の理由について、「作品のなかで、過去のトラウマや、目には見えない一連の縛りと向き合い、人間の命のもろさを浮き彫りにした」と説明。「彼女は肉体と精神のつながり、生ける者と死者のつながりに対して独特の意識を持っており、詩的かつ実験的な文体で、現代の散文における革新者となった」とたたえた。

ノーベル賞の公式 SNS にアップロードされた電話インタビューで、ハン・ガンさんは「私は韓国で本とともに育ちました。韓国文学や読者、作家仲間にとってこれが良いニュースであることを願っています」と語った。

ハン・ガンさんは1970年、韓国・光州市生まれ。93年に季刊誌に詩が、94年に新聞に短編小説「赤い碇（いかり）」が掲載され、デビューした。心に傷を抱えた人々と、その魂の回復を詩的で繊細な文章でつづり、現代韓国を代表する作家となった。

2002～05年に発表した三つの中編からなる「菜食主義者」に収録した1編で、韓国で最高峰とされる李箱（イサン）文学賞を受賞。国際的な評価も高く、同書の英語版で16年、英国の国際ブッカー賞をアジアの作家で初めて受賞した。

14年には、軍が市民を武力弾圧した光州事件を題材にした長編「少年が来る」を発表。21年の「別れを告げない」は、済州島の4・3事件をもとにした小説を発表していた。ほか、小説に「ギリシャ語の時間」「すべての、白いものたちの」「回復する人間」、詩集に「引き出しに夕方をしまっておいた」などの邦訳がある。

今年の賞金は1100万スウェーデンクローナ（約1億5700万円）。授賞式はノーベルの命日にあたる12月10日、ストックホルムで開かれる。（ロンドン＝藤原学思）

2024年のノーベル文学賞は、**現代韓国文学を代表する作家、ハン・ガンさんが受賞**しました。ハン・ガンさんは2024年5月、日本の最新邦訳の出版を受けて、オンラインイベントに参加しました。イベントの様子を再掲します。（24年5月20日夕刊掲載）



ハン・ガンさんの「**別れを告げない**」（斎藤真理子さん訳、白水社）は韓国現代史の悲劇「済州島4・3事件」をモチーフにしている。同書の刊行を記念したオンライン・トークイベントが14日、開かれ、ハン・ガンさんがソウルから創作の背景などを語った。

「過去や他者、死者と共に生きている人を描きたかった。これは愛に関する小説。人は愛する人がそばにいなくても祈ることができる。超自然的に書くことになりました」

## 「世界で評価、うれしい」 ハン・ガンさん文学賞受賞、日本でも喜び

女屋泰之 守真弓 ソウル＝貝瀬秋彦 2024年10月10日 21時16分

紀伊国屋書店新宿本店では、ノーベル文学賞の受賞が決まった韓国のハン・ガンさんの本が並べられた＝2024年10月10日午後8時7分、東京都新宿区、恵原弘太郎撮影

•



今年のノーベル文学賞に韓国のハン・ガンさんが選ばれた。母国のみならず、日本にもファンが多く、アジア初の女性作家の受賞に喜びの声が上がった。

紀伊国屋書店新宿本店（東京都新宿区）では、約 20 人の来店客が受賞者発表のライブビューイングを見守った。受賞者がハン・ガンさんだと分かると、歓声が上がった。

この日に合わせて書店ではノーベル文学賞の特設コーナーを設置。2002～05 年に発表した**三つの中編からなる「菜食主義者」**で、**韓国で最高峰とされる李箱（イサン）文学賞**を受賞したハン・ガンさんは国際的な評価も高く、同作の英語版で 16 年、英国のブッカー国際賞をアジアの作家で初めて受賞した。ノーベル文学賞の受賞の発表を受けて、在庫のあったハン・ガンさんの邦訳本 5 点を急ぎよ集めて並べた。

同店を訪れた会社員のキム・ヨンジュンさん（32）は韓国出身。たまたま足を運んだ同店で、受賞の発表を見た。「韓国では誰もが知っている作家。ただ、あくまで韓国国内のテーマを扱っているイメージがあったので、世界で評価されたのが韓国人として本当にうれしい」と話した。

今年刊行されたばかりの邦訳本「別れを告げない」を手に取りレジへ向かった。「せっかくなので日本語で読みたい」と話していた。

同店の吉野裕司副店長は「アジア初の女性作家の受賞は話題性もある。ハン・ガンさんは重厚なテーマを扱う作家だが、韓国文学ではもっとライトに楽しめる文学も邦訳されており、ジャンルの幅が広い。これをきっかけに韓国文学が日本で注目を集めるようになったらうれしい」。

## 「いつか受賞するとは思っていたが」

「菜食主義者」を翻訳した**きむ ふな**さんは、「ノーベル文学賞をいつか受賞するとは思っていたが、年齢的にまだかと思っていた。驚いている」と話す。何度も会ったことがあるというハン・ガンさんは、「何事にも動じない人」という。「国際ブッカー賞を受賞して世界的に知られるようになった後も、何も変わらない。ただ、**言葉がもっと慎重に、深くなっていっている印象だ。一貫して人間の暴力性、闇から目をそらさず描いてきた作家だ**」

## 「本当にうれしい」

2016年に国際ブッカー賞を受賞したハン・ガンさんの「**菜食主義者**」の日本語版を出版した「クオン」社長の金承福（キムスンボク）さんは、受賞の一報を聞き、「すばらしい」と興奮気味に語った。アジアの女性、韓国の作家としては初の受賞になるが、「韓国人作家としての快挙ではあるけれど、それ以上の意味がある」という。

ハン・ガンさんは、10年前に発表した小説「**少年が来る**」と最新作「**別れを告げない**」で、韓国でかつて起きた虐殺を描いた。「彼女が描くのは、深い悲しみの世界。華やかな物語ではないけれど、その深い悲しみを知ること、読者はなぐさめをもらえる」

先月、彼女の本を読んだ70代の読者から「クオン」宛てに手紙が届いた。夫を亡くした女性で、その思いをつづったものだったが、金さんがそれを翻訳して先月、韓国で本人に渡したという。すると、本人が目の前で丁寧な返事を書いて、渡してくれた。「**彼女はそういう人の悲しみに共感し、目をそむけない人。戦禍が各地で起きている中、深い意味のある受賞だ**」（女屋泰之、守真弓）

## 暴力に満ちた世界で、希望を想像する 問い続ける作家ハン・ガンさん

ソウル = 金順姫 稲田清英 2024年5月28日 9時00分

- ソウルで取材に応じた作家のハン・ガンさん = 2024年4月30日、チエ・スンド氏撮影



暴力性と、他者への愛。韓国の作家ハン・ガンさんは、この人間の二面性を一貫して作品に描き、国際的に高く評価されてきた。近年、相次いで小説の舞台としたのが、多くの犠牲を出した韓国現代史における二つの事件だ。なぜいま史実に目を向け、なにを描こうとしたのか。話を聞いた。

## ・ 愛読書、作家の父、そして次回作 ハン・ガンさんが記者に語った思い

ハン・ガンさん 1970年、韓国・光州市生まれ。「菜食主義者」でブッカー国際賞。14年に「少年が来る」。21年発表の「別れを告げない」は今年3月、日本語版が刊行された。

——私はブッカー国際賞受賞の「菜食主義者」でハンさんの作品に出会いましたが、10年前に発表した小説「少年が来る」と最新作「別れを告げない」では、どちらも韓国でかつて起きた虐殺を描いていることに目が留まりました。

「暴力は歴史の中で、世界中で繰り返されてきました。人間の暴力は、私にとって子どもの頃から宿題のようなものでした」

「私は韓国南西部の光州で生まれました。9歳で光州を離れましたが、ソウルに来て約4カ月後、光州事件が起きました」

《光州事件 光州市で1980年5月、後に大統領となる全斗煥氏が主導する軍部が、民主化を求める市民や学生らを武力で制圧。160人以上が死亡した》

「12歳の頃です。家で『光州アルバム』という冊子を目にしました。それは、犠牲者の遺族や生存者たちが秘密裏に作った、虐殺事件の記録でした。軍政下の徹底的な統制のもと報道もされない当時、事件が実在したことを証拠として残すため、殺害された人々の写真と共に広まっていたのです」

——大変な衝撃を受けたのではないですか。

「まだ幼かった私は、人間というのはあまりに怖いと思いました。自分自身も人間であるという事実が恐ろしく、世界はとても暴力的なところだという印象が迫ってきました」

「ユダヤ人虐殺の舞台となったアウシュビッツの話を知ると、その暴力はにわかには信じられないものです。一方で、地下鉄の線路に落ちた子どもを救うために、自分の命をかけて飛び込む人もいます。人間という存在が持つスペクトラム（連続体）が広すぎて、私には謎でした。その一番下はどこで、一番上はどこなのか、と」

「思春期になって、なんで生きるんだろう、私は誰なのか、人間とは何か、と悩んだ時に、同じ悩みが、それまで私が読んだ本の中にすべてあったということに気づきました」

争いで多くの命が奪われ、分断や格差も深刻な世界で、文学や作家ができることは何か。初めて日本メディアのインタビューに応じたハン・ガンさんが思いを語ります。

## 影のように見え隠れした光州

——それが文章を書く道へとつながったのですか。

「実は本を読み返してみると、そこに答えは一つもなかったのです。ただ、つらい、私が誰なのかをとでも知りたい、人生が何なのかがわからない、そんな問いがありました。文章を書くために答えを知っていなければいけないわけではない。問いさえあれば書けるんだと。私にも資格がある気がして、文章を書きたいと考えるようになりました。中学3年の時のことです」

——作家になり、数々の作品を発表されました。

「『ギリシャ語の時間』という私が5番目に書いた長編小説があります。最後に主人公2人が光に向かう小説です。そのあとにもっと明るい作品を書きたいと思ったけれど、うまくいきませんでした。なぜだめなのかと内面に分け入って考えると、そこに、私の中でまだ影のように見え隠れしている光州があったのです。これを小説で通過してこそ、前に進むことができると考えました」

——光州事件を描いた小説「少年が来る」では、犠牲となった人や事件を経験した人の語り印象に残りました。取材はどう進めたのですか。

「遺族や生存者へインタビューはしませんでした。その方々の傷を開きたくはないと思ったからです。資料がたくさんありますので、読める資料を全部読むようにしました。事件の資料を1カ月かけて読んだ時は圧倒されました。私にできるのは一緒に感じることだ

け。私は生きているのだから、この感覚と感情を小説を通じてお貸しする、そんなことしかできないと思いました」

「書いている時は、とても苦しかった。読者からも、読みながら苦しかったという感想を聞きました。そこで考えたのは、**なぜ私たちは苦痛を感じるのか、ということ**です。この苦痛が私たちをつなげてくれるようだけれど、**苦痛の理由は何か。ひょっとして私たちが人間を愛し、信じているからではないか**という気がしました」

「人間が尊厳を持つ存在だと思うから、それが砕けたのを見ると苦しいのです。だから次は、**人間の愛についての小説であればいい**と思いました。『少年が来る』を刊行した少しあとに、ある夢を見ました」

## 虐殺の後に生まれる「別れを告げない」人々

——どんな夢ですか。

「何千本もの黒い丸木が墓地に植えられた野原を歩いていると、足元で海から潮が満ちてくる夢です。お墓のお骨が海に流されてしまいそうで、できるだけお骨を高い場所に移そうと、夢の中で私は水の中を走り回ります」

「目が覚めたばかりの時は光州につながっている夢かと思いました。でもその夢の話から始まる小説を書くために数年間取り組みながら、特に2018年から2年間済州島に部屋を借りてソウルと行き来しながら思ったんです。これは、済州4・3事件を含む人間の全ての虐殺とつながっているのではないかと」

《済州島4・3事件 韓国、北朝鮮両政府が樹立される前の1948年4月3日、済州島で南朝鮮の単独選挙に反対する武装勢力が蜂起。鎮圧の過程などで軍や警察が大勢の住民を殺害した。韓国政府機関の報告書（2003年）は犠牲者数を2万5千～3万人と推定している》

「人間による虐殺の後には、必ず粘り強く哀悼する人々が生まれます。記憶し、闘争し、最後まで別れを拒否する、『別れを告げない』人々です。人間のたゆみない愛が、どのように人と人をつなげるのか、この小説を通して問いかけたかったのです」

## ガザやウクライナを前に、文学と作家の役割は

——ガザやウクライナなど、いま世界各地では多くの人々が命を奪われています。分断や格差も深刻です。このような世界で、文学や作家ができることは何だと考えますか。

「とても苦しい状況で、希望を見つけたいです。漠然とした楽観を持つのは簡単だけど、うそにもなります。かえって、ぎりぎりの、か細い希望の方が本物だと感じます」

「このように真っ暗な状況の中で希望を見いだすのは、ほとんど不可能と思えるほどきつい想像力を必要とします。しかし人間は生きている限り、想像しないわけにはいきません。希望と文学には共有する点があります。文学ですることにもまた、粘り強く想像することです」

——歴史と向き合うことにも、希望を見つけるヒントはあるでしょうか。

「『別れを告げない』の中で、主人公の一人は木工の作業中に指を切断する事故に遭い、縫った傷口を3分ごとに針で刺し血を流す施術を受けます。苦痛と神経の電流と生命が、すべてつながっているのです。歴史的事件と向き合うことは、そんなつながりを持つとすることかもしれません」

「歴史的な事件を扱うことは、過去について語る方法を探し出し、現在について語るということです。歴史を見つめて問うことは、人間の本性について問うことでもある。記憶を抱きしめ、生命に向けて進む人間の姿と能力に、私はいつもひかれます」

## つながっていく小説と小説

——読者の存在も重要ですね。

「どんな作品でも、**言語を使うことは、結局は世界に向かうこと**なので、人間に対する信頼が前提にあると思います。**私たちがみなつながっているという信頼があるから文章が書ける**のです。特に私は小説を書く時、感覚を大切にしています。それが私と小説を、そして読者をつないでくれるからです。本当に電流のように」



「冷たい雪について書けば、読む人も自分が触った雪を思いながら共に感じる。感覚を通じて私たちがつながり、私が伝えたい感情や考え、悩みや問いまでもつながります。どんな言語、どんな文化の中でも、人はみな問いかけますから。言語を通して人間が生き生きとつながっていくことに、いつも神秘を感じています。私が小説に込めたかった問いたちが、その感覚の経路を通じて読者に伝わってほしいと思います」

——暴力がやまない中、どうすれば世界と人間への信頼を手放さずに進めるのでしょうか。

「この世界はあまりに美しく、抱きしめたい。でもそこに暴力や苦痛があります。『菜食主義者』を書いた時は人間の暴力に対する問いがあり、一切の暴力を拒否することが可能なのかという問いもありました。『ギリシャ語の時間』では、私たちが人間を抱きしめられるのなら、**何を見つめればそれが可能なのか**を問いたかった」

「ひとつの長編を書くたびに、私は問いを完成させようと努力し、完成すると次の問いがまた生まれます。『少年が来る』と『別れを告げない』のように、小説と小説はつながっていく。私はそうやって問い続けながら書いてきて、ここまで来ました」（聞き手 ソウル＝金順姫、稲田清英）

## ハン・ガンさん

1970年、韓国・光州市生まれ。「菜食主義者」でブッカー国際賞。14年に「少年が来る」。21年発表の「別れを告げない」は今年3月、日本語版が刊行された。